特集

「治療可能な認知症 (treatable dementia)」の現在—その可逆性を考える—

序 文

金 野 倫 子

埼玉県立大学保健医療福祉学部共通教育科

“Treatable Dementia: Current Situation and Challenges in Clinical Practices”

Introduction

Michiko KONNO

Center for University-wide Education, Faculty of Health Sciences, Saitama Prefectural University

慢性、進行性の全般的認知機能低下を来す認知症は、その原因となり得る疾患が優に 150 を超えると言われている。認知症は一般に進行性、不可逆性と捉えられているのに対して、一部の原因疾患は早期に発見介入するならば、治癒ないし改善が望めるとされている。

進行麻痺等の臨床経験から、認知症の一部は回復するという認識は、精神医学では実際のところ 1930 年代あたりから共有されていたと見受けられる。しかし、1967 年 Hills らの正常圧水頭症の報告などがあり、1980 年の Cummings らによる「回復可能な認知症 (reversible dementia)」の提唱を経て、「治療可能な認知症 (treatable dementia)」の概念が成立してきたのは 1980 年代とされている。むしろこの用語の登場によって認知症一般は“不可逆的で治療不能”なものとして改めて定義されるようになったふしがある。

現在広く知られ定着している「治療可能な認知症」の概念だが、どのような疾患が含まれるのか、どのように診断がなされるのか、どの時点でどういった介入をすればどこまで回復するのかについては医学の発展により変化するため、他方では不断に update していく必要がある概念でもある。

一方で、慢性・進行性・不可逆性の認知症と「治療可能な認知症」との関係も変化しつつある。アルツハイマー型認知症 (Alzheimer's disease: AD) を例にとると、神経細胞外 β アミロイド沈着や神経細胞内異常リン酸化タウ蛋白の凝集・蓄積といった病理過程に直接介入する疾患修飾薬 disease modifying drug の開発が現在進んでいる。その進捗は当初の予想よりも緩徐ではあるが、AD を可逆的で治療可能にする方向を目指すものであり、「治療可能な認知症」との距離は少しずつ縮まっているといえる。

また、AD 治療薬の開発や治験の途中でわかってきたことのひとつは、神経病理レベルでは改善が見られても、認知機能改善は必ずしも並行しないということである。こういった問題や他の知見の蓄積によって、研究の関心の一部は“AD の病理過程においてどの時点までに介入

すれば認知機能は改善し可逆性の経過をとり得るのか”といった問いに向かっている。このような問いに対しても先の「治療可能な認知症」における可逆性についての知見はヒントを与えると考えられる。

今回の特集では脳神経外科、腎臓高血圧内分泌内科、血液膠原病内科、神経内科、精神神経科から寄稿を頂き、各領域における「治療可能な認知症」について、診断と治療の実際を“可逆性”を中心として概括し解説していただいた。脳神経外科領域においては、手術によって慢性認知機能低下の改善が見込まれる疾患として正常圧水頭症や慢性硬膜下血腫があるが、今回は高齢者に多い特発性正常圧水頭症 (idiopathic NPH: iNPH) について、髄液排除試験後における症状改善の多様なパターン、シャント手術の時期による改善の違いなどが詳述されている。腎臓高血圧内分泌内科の領域における「治療可能な認知症」としては甲状腺機能低下症が有名であるが、今回は腎不全と認知機能低下をとりあげ、加えて透析中の認知機能低下、更に透析と関連して糖尿病と認知症発症リスクの関連を考察するという展望的な内容となっている。血液膠原病内科の領域からは、コバラミン (ビタミン B_{12}) 欠乏症による巨赤芽球性貧血をとりあげ、さらに高齢者に少なからずみられる、貧血症状の乏しい潜在性コバラミン欠乏症の診断と対応も付した解説となっている。神経内科領域では中枢神経系にみられる感染症について解説、古典的な症状が出現しにくい高齢者においては認知症鑑別の際念頭におくべき疾患であることを指摘、また中枢神経系が感染症という事態を受けた時に精神症状はどのような経過を辿るのかについて概括している。精神神経科領域ではアルコール依存症の経過中にしばしば見られるウェルニッケコルサコフ症候群について、概念の変遷、複雑な病態生理、治療とその予後について概観している。

認知症診療に関わる者としては知っておきたいポイントが散りばめられおり、明日からの診療がより厚みを増すと感じられる今回の特集である。